

加藤 隆著『新約聖書はなぜギリシア語で書かれたか』

辻 学

本書は、加藤隆氏が、『新約聖書はなぜギリシア語で書かれたか』（大修館書店、1999年）に続いて出版したもので、講談社選書メチエの1冊として出されたことからわかるように、キリスト教徒でない一般読者をも念頭に置きつつ、キリスト教および新約聖書について、専門的な研究の成果を織り交ぜながら解説する内容となっている。

とはいえ本書は、新約聖書の単なる概説を意図しているわけではない。著者は、新約聖書というものが何故、権威ある書物として成立し、キリスト教徒によって受け入れられるようになったのかを解明すべく、キリスト教における「権威」の問題を軸にして、新約正典成立までのキリスト教史をたどっていきこうとする。これが、本書の中心課題である。

「プロローグ」ではまず、予備知識として、新約聖書の構成内容が示され、ついで、本書の中でたどっていくことになる、新約正典成立までの歴史的な流れがまとめられている。

いささか細かいことを先に書くようで恐縮だが、新約の27文書を紹介している表(8頁)には、気になる点がある。まず、第二テサロニケ書簡を真正パウロ書簡に加えているのは、反対が多いとはい

え、一つの見方だと思っただけでも、フィレモン書簡を真正書簡から外しているのは、どのような理由によるのだろうか(誤植?)。また、「テモテ者への第一の手紙」というような表記が見られるが、「テサロニケ者への第一の手紙」などと並べられている以上、これでは、「テモテ」という場所に住んでいる人々へ宛てられた手紙と誤解されてしまう(7頁の本文中にも同じ表記が見られるので、こちらは誤植ではないようである)。そもそも、「テサロニケ者」という表記自体も、日本語として奇妙な感じがする(なぜローマ書だけが「ローマの者への手紙」となるのかも不思議である)。キリスト教にあまり馴染みのない読者をも念頭に置く以上、この類の事柄には充分注意を払ってほしい。

また著者は、教会主流＝多数派と、対立する流れ＝異端との間に緊張・分裂が繰り返されたことを、キリスト教の特徴として述べているのだが(11-13頁参照)、その際に、「教会主流」という概念をいささか安易に用いているように思われる。例えば、1世紀後半から2世紀はじめにかけての「教会主流」とは、具体的には何を指しているのだろうか。

第1章「イエスの時代」では、イエスが活動した当時のユダヤ人社会が置かれ

ていた状況、ユダヤ教の様々な宗派・集団、そして、そのような状況下でのイエスの活動が描かれている。

著者は、当時のユダヤ人社会が、ローマ帝国の支配下にあったことを述べた後、その状況でどのような宗教活動がなされていたかを見るために、サドカイ派・エッセネ派・ファリサイ派、またゼロテ派・ヘロデ派についてそれぞれ簡単な説明を加えている。その際著者は、教科書的な説明に加えて、各宗派・集団についての著者自身による解釈を述べていて興味深い。疑問に感じる内容も少なくない。たとえば、エッセネ派の「厳しい生活態度には、大多数の者たちについての根本的な軽蔑が潜んでいる」のであり、「こうした論理は、エッセネ派に限らず、厳しい修行や生活が必要だとするあらゆる流れに潜んでいる」(28頁)と著者は言う。だがこれは、宗教的禁欲というものに対するあまりに一面的な評価のように思われる。また、「エッセネ派はヘロデ派から援助を受けていた節がある」(29頁)というような推測には、それなりの根拠を挙げるべきであろう。ファリサイ派が、律法の細々とした規定を守ることにこだわり、律法の再解釈・日常への適用を試みたのは、「神の民であるはずのユダヤ人が非ユダヤ人に支配されているという現実についての問題を正面から扱うことを回避する」(30頁)ためという説明も適切とは思えない。

そのようなユダヤ教社会を背景にして登場したイエスの活動を、次に著者は簡潔に描いている。著者によれば、イエスが、その短い公活動の期間内に中心的に

取り組んだのは、ユダヤ人社会内部における差別の撤廃の問題であった。イエスは、病人を癒し、罪人と呼ばれている人々と公然と交わりを持つとともに、「神殿制度の経済的搾取」(48頁。この点については、もう少し説明がされるべきであろう)の問題を激しく攻撃した。しかしながらイエスの活動は、民衆の間で人気を博したとはいえ、イエスの期待するような回心は、一般ユダヤ人の中にはなかなか生じなかった。イエスと彼の弟子たちは、「存在するすべての問題を解決はできないということが、避けがたく認識されるようになった」(50-51頁)閉塞的状况の中で、結局はエルサレムに赴き、ユダヤ人指導者の中枢との対決を試みるに至ったというのである。

「存在するすべての問題を解決はできないということが、避けがたく認識されるようになった」というような心理的要因でイエスの活動を説明することが適切かどうかという問題もあるが、キリスト教における権威の問題を中心に論じる本書の趣旨から考えれば、イエスの活動がどのような「権威」として捉えられたのかということがここで考察されていないのは不思議である。著者は次の章で、復活したイエスの権威について論じてはいるが、地上のイエスの活動に何らかの権威が感じられたからこそ(マルコ1:27!),復活のイエスもまた権威を帯びることができたのではないだろうか。

第2章「復活したイエス」では、イエスの復活とそれに続くエルサレム教会の成立・展開が描かれている。イエスの弟子たちを中心とする人々は、イエスが

復活したと主張した。それは、「イエスが神に匹敵するような権威のある存在だと主張すること」であり、「ユダヤ人社会にこれまで存在していなかった権威が生じたのだと主張」(55頁)することであった。そしてこの新しい権威を、ユダヤ人社会の中で認めさせるために、聖書がその根拠づけとして選ばれたと著者は説明する。「ユダヤ人社会において権威が認められている聖書は、伝道活動を進めるうえで必要から、エルサレム共同体の指導者たちの側からもユダヤ人社会にたいして権威あるものとして認められた」(61頁)というのである。

伝道活動を進める上での必要から、(ユダヤ教の) 聖書という権威が援用されたという説明自体は間違っていないと思うが、このような著者の書き方をしていると、エルサレム教会の人々自身は、聖書の権威をとくに認めていたわけではないけれども、伝道の道具として必要だから聖書を権威として援用したに過ぎないというような印象を受けてしまう。しかし、エルサレム教会の人々は、自分たち自身が聖書の権威を認めていたからこそ、その聖書に基づいてイエスの出来事を理解し、説明しようとしたのではないだろうか。

第3章「主の兄弟ヤコブが登場したとき」では、エルサレムを追放されたヘレニストたちの中からマルコ福音書が生れたことで、イエスの弟子たちがそれまで独占していた(イエスの言動の直接証人としての) 権威が後退すると同時に、書かれた文書を権威あるものとする新たな伝統が生じたこと、また、エルサレム教

会において、ペトロに代る新しい権威者として主の兄弟ヤコブが登場してきたことが述べられている。

マルコ福音書の成立が、原始キリスト教史において重要な意味を持っているという説そのものには異論はない。もっとも、マルコ福音書がヘレニストの流れから生れたということを、著者のように断定してしまうことには疑問を感じる。ましてや、イエスの弟子たちが、自分たちの権威を維持するために、「イエスの言動についての情報を書き記したある程度以上まとまった文書が書かれようとしても、圧力をかけて、何としても阻止しようとしていたのではないだろうか」(77頁)というような想像が必要とは思えない。また著者は、マルコと同様、イエスについて「書かれたもの」であるQ資料の存在には触れていないが、Q資料の「権威」についてはどのように考えるのであろうか。

続く第4章「パウロの分離」では、パウロの生涯を追いつつ、パウロが、エルサレム教会の権威とどのように関わったのが考察されている。著者によればパウロは元来、「エルサレム教会の側に属していた人物」(93頁。ヘレニストの側ではない、という意味か? しかしパウロは、アンティオキア教会に属していた) だったが、エルサレム教会の指導者たちと並ぶ権威を自らも主張して、エルサレム教会主流と激しく対立するに至った。しかし結局パウロは、主の兄弟ヤコブの権威の前に屈することになったという。

第5章の「世界教会の構想」という題は、パウロの活動の基本的目標が、「いわ

ば世界教会を作ろうとしたのであり、そのためにローマ帝国の支配構造を援用しようとし、具体的にはローマに中心的教会共同体を作ろうとした」(116-117頁) ことにあるという、著者のテーゼから来ている。しかしながら、そもそも「世界教会」という語が具体的に何を意味するのははっきりしない上に、パウロ思想の解説を主な内容とするこの章の叙述からは、このテーゼを裏付けるような内容を読み取ることは難しい。

続く第6章「ユダヤ人社会の危機」では、キリスト教の歴史に新たな展開をもたらした大きな要素として、(第1次)ユダヤ戦争の敗北、そして、ファリサイ派主導によるユダヤ教の民族主義的展開、それに伴う、ユダヤ教からのキリスト教の分離が述べられている。この章には、当時のキリスト教にとっての権威は何だったかということをめぐる、旧約聖書・口頭伝承・使徒称号に関する考察も含まれているが、歴史的叙述の流れを中断してまで、この考察がなぜここでなされねばならないのかは、よくわからない。またこの章では、キリスト教の側からユダヤ人に伝道することを念頭においている文書としてヤコブ書とマタイ福音書が挙げられているけれども、ヤコブ書の読者が「ユダヤ的キリスト教徒」と「キリスト教に関心のあるユダヤ人」であるなどという説を唱えている研究者は今日では(加藤氏の他には)ほとんどいない。マタイ福音書が「個人的英雄主義への呼びかけ」だというまとめ方も、マタイ福音書に見られる共同体的関心の強さを考えれば、適切とは言えないように思う。

ヤコブ書やマタイ福音書が「ユダヤ教側に合流を呼びかけようとする流れ」(198頁)だというのも、理解に苦しむ表現である。

第7章「脚光を浴びるパウロ的教会」において著者は、ユダヤ教との分離が結果として、パウロ的教会の流れを再び注目させるに至ったことを述べると共に、ルカ文書・パウロ書簡集についての解説をなしている。なお著者は、ルカ文書の著者を「ユダヤ人出身キリスト教徒であるとするのが妥当」(184頁)と述べているが、通説に反対するだけの説得的な論拠は示されていない。復活のイエスの顕現をエルサレムに設定していることや、ユダヤ人のキリスト教指導者ばかりを描いていることが、どうしてルカを、ユダヤ人キリスト教徒と断定する根拠になるのだろうか。また、「ルカ文書では、ギリシア・ローマ的な支配のあり方が積極的に評価されている」(184頁)ということも著者は強調し、「このことはルカ文書が、パウロのローマ到着のエピソードで終わっていることに端的にあらわれている」(同頁)というのだが、使徒行伝の結末からなぜそのようなテーゼが導き出せるのかよくわからない。さらに、著者によればルカ文書では、「キリスト教運動がどのように世界を管理するべき」かが問題となっているというのである(188頁)。興味深い主張だが、本書の説明を読む限りでは、説得的とは思われない。

第8章以降は、キリスト教の中に、様々な方向性を持った流れが生じてくる様子を描いている。第8章「模索するキリスト教」では、「道徳主義的な流れ」と「組

織的秩序を尊重する流れ」が取り扱われており、著者によれば前者はさらに、(1)「ユダヤ的キリスト教」(ディダケー、Iクレメンズなど)、(2)「ユダヤ的な枠を超える流れ」(ヘブライ、バルナバ、IIペトロなど)、(3)「非ユダヤ的傾向」(ポリュカルポス書簡)という三つの範疇に区分できるという。「組織的秩序を尊重する流れ」としては、ヨハネ文書やイグナティオス書簡が挙げられている。

第9章「乱立する文書」は、前章の内容を受ける形で、1世紀末から2世紀前半にかけて現れた文書群が、(旧約)聖書・主の言葉・使徒の宣教の三つを権威の根拠としつつ、自分たちの直面している新たな状況における秩序と権威の確立をそれぞれ目指していることを述べている。第10章「独自の聖書」と第11章「正典の成立」では、マルキオンという「異端」の登場と、彼が打ち出した、キリスト教独自の聖書を持つという発想を教会主流が取り込んで、現在認められている「新約正典」を確立するまでの次第が語られる。教会主流は、権威ある文書集を作り出すことによって、自分たちの権威の下に、キリスト教全体の統一と秩序を打ち立てようとしたというのである。このあたりは、すでに田川建三氏の近著「書物としての新約聖書」(勁草書房)で詳述されている事柄とかなり重複している上に、こちらは紙幅の関係上、より簡略な叙述に留まっていて、田川氏の書物を超えるような内容は特に示されていない。

著者は、マルキオンの試みの新しさを、権威ある文書の限定という点に見る。ただし、「権威ある文書を限定しようとする

雰囲気は、曖昧なものではあったが、(マルキオン以前から)ある程度は存在しはじめていた」(244頁。括弧内は評者の付加)と言う。ところが、その一方で、「マルキオン以前のキリスト教は、『新約聖書正典』をもつことを考えもしなかった」(245頁)とも書かれているので、読者としては、新約正典をもつという発想が、果たしてマルキオン以前から存在したのか、しなかったのかについての説明がはっきりしない印象を受けてしまう。このあたり、もう少し明瞭な叙述を求めたいところである。

なぜ新約正典が成立したのかという問題を、キリスト教史における「権威」をめぐる葛藤という視点から解いていこうとする著者の狙いは非常に興味深い。もともと、キリスト教史における神学的多様性の問題を、「権威」という視点から説明しようとするために、しばしば教会政治的な事柄に叙述が終始してしまい、それぞれの集団・分派が持つキリスト教理解の中身に対する考察が不十分だと思われる場合も少なくない(パウロ思想についてだけは例外的に、第5章で非常に詳しい解説がなされているが、かえってそのために、初期キリスト教における権威の問題という主題の流れを妨げているように思える)。例えば、マルコ福音書が書かれたのは、イエスの言動を直接は知らなかったヘレニストにとっての客観的な権威を体現するため(77頁)に過ぎなかったのだろうか(マルコが、ヘレニストの流れから生れたかどうかは別にして)。ルカ文書の著者が、「すでに世界支配のたいへん野心的な構想を提案してい

る」(189頁)といった仮説も、著者の関心が、ルカ文書の神学的な中身ではなく、政治力学的な事柄に置かれていることから出ているのであろう。

また著者は、憶測とか想像だと断りつつも、突拍子もない想像をしばしば叙述の中に持ち込んでいる。例えば、ゼロテ派に関する説明の中で、ゼロテ派が「レースタイ」(強盗)と呼ばれることがあったのは事実としても、だから、イエスと共に十字架につけられた二人の「強盗」も「ゼロテ派の者であるという可能性が大きい」(35頁)というのは、論理の飛躍であろう。それならば、「強盗」と呼ばれている者は皆、ゼロテ派の「可能性が大きい」ことになってしまう。さらに、「サマリア人の譬」(ルカ10:30-35)に出てくる「強盗たち」もゼロテ派であることが示唆されていると著者は言うのだが、その論拠には驚かされる。著者によれば、強盗たちが旅人を「半殺し」にしたのは、十戒の「殺すな」という掟を守ったからで、それはゼロテ派の立場とよく一致する。その一方、祭司とレビ人が旅人を助けなかったのは、ゼロテ派に襲われた者を助けると、今度は自分の身が危なくなるからだというのである。サマリア人が旅人を助けることが出来たのは、彼が、ユダヤ教内部の対立圏外にいる外国人だったからで、しかも、援助のための「物的な手段に余裕がない場合には道徳的善意だけでは援助を行えないということが示唆されているのも明らか」(36頁)とも

著者は言う。想像はふくらむ一方である。また、使徒行伝16:7で、パウロのピチニア传道が、イエスの霊によって阻まれたという叙述から、「ピチニアには実際には传道されなくてもかまわないことが示されている」(186頁)などという事柄を読み取れるのは、おそらく著者だけであろう。著者が、「……ではないだろうか」と書いている場合には、この種の想像が多い。

こういう想像なら、根拠がないとして直ちに退ければすむ。しかし、次のような発言は見過ごしにできない。「被差別の状況にある者たちの立場が、差別を受けているというだけで正当なものでなければならぬといった短絡的な評価は避けねばならない。差別を受けるような状況にあっても、差別を受けることが不当であると十分に主張しえないような場合もあるし、そのような状況に彼らが安住しているような場合もある」(39-40頁)。いったい著者は、差別ということをごどのように考えているのだろうか。差別には正当なものもあるとでも言いたいのだろうか。このような、社会問題に対する無神経さには驚かざるを得ない。

書評者の務めとして、批判的な事柄をやや多く並べたけれども、新約正典成立までの歴史的経過という重要な課題に取り組み、このような書物に纏め上げられた著者の努力に敬意を表したい。

〔講社選書メチエ、1999年〕